

上田染谷丘高等学校の歴史を紹介 シリーズ2 「校歌」について

私たち、上田染谷丘高等学校の校歌は昭和二五（1950）年に作られました。以後 67 年間にわたって歌い継がれています。
ここでは、この校歌が作られた経緯や校歌の言葉の意味について、「百年誌」（平成 13 年）の記述と、かつて本校に在職された
国語科の先生（お名前などは不明）の解釈をもとに紹介します。

長野県上田染谷丘高等学校 校歌 作詞 さとうはるお 佐藤春夫 作曲 しもふさかんいち 下総皖一

（一）

あか こころ 明き 心 を
おか むか 丘に 対へる
まなび われら 学びの我等
うつろ いろ 色に
ふか まこと 深き 真実を

そめや 染谷の
まなびや 学校に
もみじば 紅葉の
そ 染まざらん
み し 身に 染めて

明き心…明朗な心
うそ偽りのない心を明き（赤き）心というので、この意味なのかも
しれません〔社会班〕
染谷の丘…かつて本校校舎があった場所から見える東側の染屋台地のこと
対へる…染屋台地の丘と向かい合っている
うつろふ…移り変わりやすい
染まざらん…染まらないでいよう
真実…真理のこと
各番の最後のフレーズが「待遇表現」と「倒置表現」になっている

（二）

ちくまかわべ 千曲川辺に
え ぼ し みね 烏帽子の峰の
しろ な お 城の名に負ふ
ときわかきわ 常盤堅磐ぞ
つよ いのち 強き 命 を

お ほたる 追ふ 蛍
ゆき め 雪を 賞で
まつ は 松の葉の
たのもしき
つちか 培 ひて

烏帽子…上田市と東御市の境にある烏帽子岳
賞で…ほめ称える
城…上田市真田にあった真田氏の本城で松尾城のこと
常盤…常緑樹のこと
堅磐…堅い岩のこと
常盤堅磐…物事が永久不変であること
ぞ たのもしき …係り結びの強調表現
培ひて…育（はぐく）もう

（三）

いざやまな 遊ばまし
お く 老いて悔いなき
おも で はな 思い出の花
まな にわ 学びの庭よ
きよ こころ 清き 心 を

あそ 遊ばまし
わか ひ 若き日の
とど 留むべき
よ とも 好き友よ
はげ 励まして

いざや…さあ
遊ばまし…遊びたいものだ（「～まし」は「～しようかしら」の意）
悔い…後悔すること
思い出の花…素晴らしい思い出
留むべき…（思い出を）つくっておこう（「～べき」は連体止めの強調表現）

【かつて本校に在職された国語科の先生（お名前は不明）による解釈 上記語句説明も同様

一部社会班の考えによる解釈も記述してあります】

（一）

染谷台の丘に向かい合っている校舎で学んでいる私たちは、心身に深い真実を体得して、決して、秋の紅葉のように、
赤くなってもすぐ色あせるような、はかない浮世の流行・浮華に染まらないでいよう。

（二）

千曲川の河べりで蛍を追いかけて、烏帽子岳の峰の白い雪を愛し、松尾城の名に負う（その松の葉は常緑樹であるが）、
常緑樹や固い巖は何と美しくたくましく不変であることか！ 私たちも、それらの強さに学び、強い命をたくましく育もうよ。

（三）

さあ、清き心を奮い立たせて、大いに学び大いに遊ぼうではないか。やがて年老いても若い青春の日を後悔することの無いように。
今この青春の時に素晴らしい思い出をつくっておこう。学びの校舎よ、そして共に学ぶ良い友人たちよ。

上田染谷丘高等学校の歴史を紹介 シリーズ2 「校歌」について

①校歌の制作過程

校歌は以下のような経緯（「百年誌」）で昭和25年に制定されました。

「（昭和25年）六月八日、時代の変遷により旧校歌が不適當となったので、これに代わるべき新校歌の制定を期し

その作詞を佐藤春夫（詩人・作家）、作曲を下総皖一^{しもふさかんいち}（作曲家・音楽教育家）にそれぞれ依頼した

所^{ようや}漸く出来上がったので、同日校内放送によってその発表会を行った。」（『五十年小史』より）

【具体的な経緯】

昭和23年9月22日 職員会に「新校歌・校旗の作成について」の提案

昭和24年9月 1日 職員会で「新校歌作成委員会」が設置

昭和25年6月 8日 校内放送で新校歌発表会を実施

【校歌制作にかかわった菱田武夫先生の書簡（須田美智子様宛）】

「校歌制作の経緯において

菱田武夫

私と佐藤春夫先生は大正十二年以来の知己で…以来三〇年に亘り家族ごと親しくしていた。
（略）

（昭和）二三年には校長（丸山諒男校長）の委嘱により、私は新しく校章を考案した。

超えて二四年か二五年に校長より校歌制作の話があり、校歌を作りたいと思うが佐藤先生に
お願いしてほしいがどうだろうと言う相談があった。 その時既に東京に引き上げて居られた
先生に、私は在京の妹を通して連絡して貰った。妹からは間もなく、先生の御快諾を得た。歌曲
に就ても先生から、信時（潔）先生に願ひしたらどうかと言う助言をいただいた。と言う返事
があつて、私は直に作詞の快諾と作曲に就ての助言とを校長に伝えた。

やがて暫くして先生から歌詞の原稿が届いた。歌詞は原稿用紙三、四枚に、私信一枚であつ
た。早速校長に届けた。（略）

その後作曲は、清野君の芸大時代の師であつたという下総皖一氏に依頼された。（略）

この佐藤先生の歌詞の原稿は学校にとり、文化資料として大切に保存されるべきもので現存
しないとすれば…誠に残念、此上ないことである。

以上

平成四年九月識

上田染谷丘高等学校の歴史を紹介 シリーズ2 「校歌」について

②作詞 佐藤春夫先生による「校歌の大意」と上田高等女学校校歌

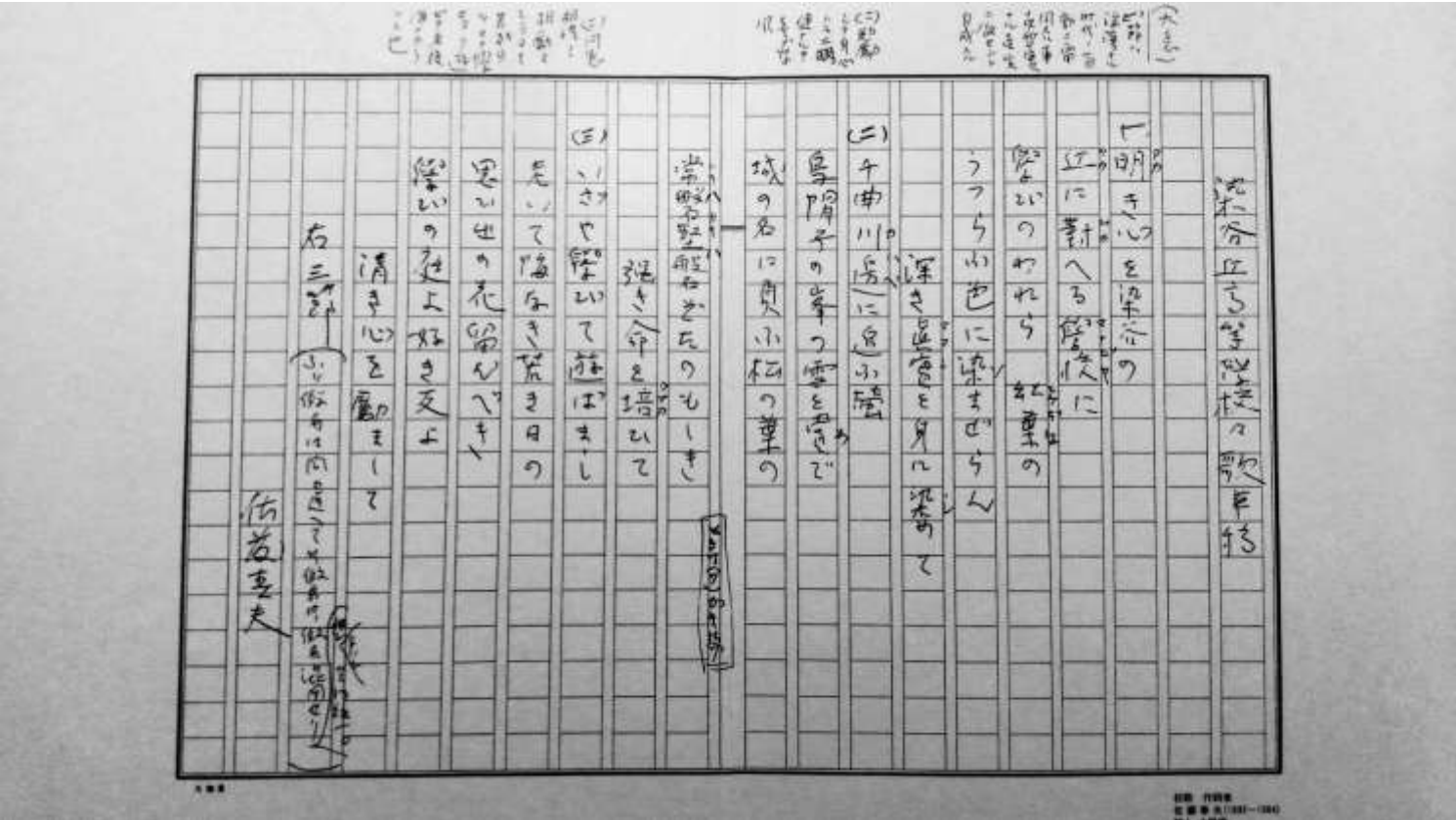
【校歌の大意】

染谷丘高等学校々歌草稿 （作詞者 佐藤春夫氏による）

校歌 大意

- (一) 節は浮薄なる時代の盲動に雷同する事なく質実なる真実に徹せんと自戒する
- (二) 勉励して身心ともに剛健なるを喜ぶ学風
- (三) 同窓相睦み相励ましてよき若き日をよく学びよく遊びて老後悔なからんと也

校長室に飾られている校歌草稿の一部



上田高等女学校校歌 作詞：大和田健樹 作曲：依田辨之助（上田高等女学校は明治34年4月1日に開校）

一、
烏帽子が巖のいや高き 教の道のみことのり いただきもちて夜昼に たゆまずはげめ国のため 忠と孝との行を 智徳すすむる学業を
二、
千曲の川の一筋に 師長の教まもりつつ 礼を重んじ義を主とし 人に誠をつくすべし 濁らぬ水を鏡にて 洗へや心のちりひちも
三、
温和の衣を心に着 操の鎧に身をかため 千挫たまわぬ心こそ 城の名におふ松の葉の 千代に八千代に守るべき わが学校の婦女の道

* 「烏帽子」「千曲川」「城の名におふ松の葉の」の歌詞が、現在の校歌の2番に使われています。



佐藤春夫先生 出典：wikipedia



上田高等女学校校歌『上田染谷丘高等学校百年誌』より